

## 第 18 回スタディーツアー

2019. 1. 10 (木) ~1月 21 日 (月)

看護師付きの贅沢なツアー (笑)

年末から年始にかけてがぼくには鬼門のようだ。第 11 回のスタディーツアーはワンドロップ小学校の開校式なのに、微熱が続いて肝臓の数値が悪くなってキャンセル。2 年前の年末には家の周りの竹藪 (たけやぶ) を掃除していて、はねた竹の枝が目に入って緊急に神戸の病院まで行くことになった。今回は、年末に神戸で開かれた教え子の同窓会に出席しての帰り道、バス停から家までの暗い道を歩いていて溝にはまり右手首を何針も縫う傷。幸い 30 日に休日診療になっていた小野市の医院で手当をしてもらえて助かったが、年が明けて 2 日、右わき腹がチクチク痛む。しばらくするとお腹の周りに発疹が出てきた。4 日に皮膚科に行ったら带状疱疹だった。

スタディーツアーは 10 日から。手首の傷も、带状疱疹も治らないまま衛生環境の良くないバングラデシュに行って、ぼくのせいでスタディーツアーの活動に支障をきたすような事態になったら大変だ。

今回は看護師の安達さんがいてくれて、それだけで安心だった。

1 月 10 日 (木)

ダッカ時間で 21 : 00 に空港着。今回初めて現地でアライバルビザ (無料) を申請した。担当の審査官が変なおじさんで、若い女性の安達さんが気に入って、ビザに関係ないことをペラペラしゃべって手間どる。「日本に行きたい」、「手紙を送ってくれ」とか何とか言っているらしい。指紋認定も読み取りが悪くて何度も繰り返させられる。6 人のビザが取れるまで 1 時間以上かかる。

アライバルビザを取ったら、パスポートを見せるだけでイミグレーションはチェックなしで通過。

空港にはいつものラジョンさんが迎えに来てくれていた。6 人分の荷物を積み込むのが大変。乾季のダッカは相変わらず土埃まみれ。靄 (もや) がかったようで前が見えにくい。

深夜なのにダッカの市内を抜けるのに激しい大渋滞。湯下さんと岡さんが車酔い。何度か車を止めてもらうのに、安達さんがラジョンさんに英語で伝えようとして身振り手振りで四苦八苦するのがすごい。

コミッタまで 4 時間近く、猛スピード。追い越し、割り込み、クラクション鳴らしっぱなし、やりたい放題。これで事故が起こらないのが不思議なくらい。ラジョンさんの運転技術はすごい、いつもスリリング。(帰りもダッカまでラジョンさんが送ってくれたが、その時はみんなスリリングな彼の運転を楽しんだ。)

1 月 11 日 (金) バングラデシュは休日。

午後 2 時出発の予定が、バングラデシュ時間 (笑) でワンドロップ小学校に向けて 3 時発。

コミッタの奨学生たちが学校に集まっている。その親も、ワンドロップ小学校の子らも、関係のない近所の子らも来ている。

大西さんがロシュミアに通訳してもらって奨学生の面接をしている間、ワンドロップ小学校の 4 年生が中心になって新入生の教室を掃除してくれる。汚れた机や椅子、床までも雑巾がけしてくれる。

面接を待つ奨学生も、1 年生の教室の飾りつけをしてくれる。紙花や、紙



テープのリングを作る。付き添ってきた親も一緒になってやってくれる。ぼくの担当のくす玉も去年のものをなんとか修復できた。

\*バングラデシュの先生らは子どもたちを大切にしよう、学校を楽しくしてやろうという気持ちがないのかな。机や椅子が汚れていて、壁には前回7月に生徒と一緒に作った切り絵などが貼られたままで殺風景。先生らは子どもたちが大好きみただけど、安い給料だから決められた時間だけ働いて、あとは知らない、ということなのか。バングラデシュではこういうのが普通なのかな。ぼくだったら、勤務時間外でも朝早くから学校へ行って教室をきれいにし、壁には生徒の作品などで飾ったりしておく。放課後には勉強の遅れた子の補習授業をしたり、グラウンドで遊んだり、また家庭訪問もしたりして、ぼく的生活時間はすべて子どもたちのことだけに使うだろう。

### 1月12日(土) <運動会と入学式>

6時半、起床。街なかを散歩。10分歩いてコミッラの駅へ。朝日が大きく見えて綺麗。駅前の広場や駅の構内で寝起きする人たちがいる。帰りはリキシャ。

8時出発。9時、学校着。

子どもたちが、ぼくらの名前を呼びながら集まってくる。岡さんはすごい。個人写真を見て子どもたちの名前を必死になって覚えたそうだ。ぼくは、もう3年も見慣れた顔なのに一人も名前がわからない。

英語を上手に使えるようになって話しかけてくれる生徒がいても、ぼくはベンガル語はもちろん英語もしゃべれない。恥ずかしいことだ。

今年の運動会は、先生らを取り仕切っている。段取りはちょっと悪くてゲームがスムーズに進まないが、日本人のぼくらを頼ることなく、自分たちでやろうとするのがとてもいい。最上級生の4年生がリーダーとなって先生の手伝いを積極的にしているのもいい。(朝礼でも上級生のリーダーが自主的に取り仕切っているのがいい。)

これまでは日本の種目(ムカデ競争、リレー、スプーンリレーなど)をいくつか取り入れていたが、今回はすべてバングラデシュの種目だけでやりきった。



ランチはタリクさんが、グラウンド南の空き地にレンガを並べて積んだ竈(かまど)でキチュリのご飯とチキンカレーを作ってくれた。(160食) 生徒も先生も、保護者も、地域の人もみんなグラウンドで美味しいカレーをお腹いっぱい食べられた。残したご飯を家に持って帰る子もいる。家にはお腹を空かせた兄妹がいるのだろう。

今後のランチは、校舎脇に調理場を作って週に2、3回キチュリなど手作りの食事を出す。ランチ代はこれまで通りという予定だったが、ラブリー先生が、週に2、3回、生徒全員が食べられる量のキチュリを家で炊いてくれることになった。費用もこれまで通りでできるらしい。実際ぼくらがいる間に、2回ラブリー先生の家で作ったランチを子どもたちが食べた。ふだん粗末な食べ物しか食べられない子らが、お腹いっぱいご飯が食べられるのは幸せなことだ。



ランチのあと、残飯やプラスチック皿などのゴミが校舎の周囲に捨てられている。どんなに貧しく粗末でも、自分の家の中や庭にはゴミはなく不思議なくらいきれいに掃除されている家が多いのだけど、ちょっと離れた所にはゴミが捨て放題だ。これが当たり前になっているのだろうけど、ワンドロップ小学校は校舎内、グラウンドはもちろん、その周囲もきれいにしておきたいものだ。バングラデシュのゴミ問題はちょっとやそつとでどうにかなるものではないが。

ランチのあと、ルニさんがくす玉を割る。成功。新入生がキャンデーレイを首に掛けてもらって教室に入る。上級生は階段に並んで大歓迎。日本で手縫いされたバッグや、筆箱、鉛筆、ボールペンなどの文房具、タリクさんが用意した制服上下、日本から冬の寒さ対策に小野の中学生らが集めてくれた上着などがプレゼントされる。



1月13日(日)

6時半朝食。7時半に出発してアナス、ロシュミアの学校を經由してワンドロップ小学校へ。



朝礼までの時間、子どもたちはボール遊びや縄跳びなどをして楽しそうだ。朝礼の時、一人、気分が悪くなって倒れる。昨日はふだん食べたことのない美味しいカレーを腹いっぱい食べた。今朝は持って帰った残りのカレーを食べて、遊びまわったためにもどしたようだ。看護師の安達さんが手当てしてくれるので安心だ。

今日から、時間割の一部の時間をもらって日本のぼくらが担当する。

岡さんがスポーツの時間。準備体操をして、ゴムひも跳びのリレー、スプーン競争、二人三脚、二人でするムカデ競争など、生徒も元気だけど、岡さんはもっと元気。指示する声が大きく響きわたる。



湯下さんがアートの時間。グラウンドに出てクレヨンで絵を描く。初めて使うクレヨンに戸惑って絵にならない。いろんな色塗りをしているうちに、みんな思い思いの絵が描けるようになる。初めての経験でうれしそうだ。

安達さんは切り絵を担当。ハサミの使い方が下手な子もいたり、色紙を折って切る方向を間違えたりするが、とても上手に自分なりに工夫してやっている子もいる。みんなとても楽しんでいる。



ぼくはモビールの担当。安達さん、浅田さんらに手伝ってもらう。段取りもよく考えて、材料も一人ひとりの分を袋に入れて、準備万端のはずだったが、いざやってみるとドタバタ。でも、上手にできた。前回7月の時のものよりいいものができた。

紙飛行機を折って、グラウンドに出て飛ばしあう。みんな喜びすぎて興奮して、てんてんばらばら言うことを聞かない。でも上級学年にはリーダーになる子がいて、集合、整列などクラスを取り仕切ろうとしてくれる。

2時半、タリクさんの事務所。

3時すぎ、奨学生だった一人が事務所に訪ねてくる。カレッジに入る資格のテストに失敗。もう一度やり直す気持ちがあれば支援を続けてもいい、と里親から勧められていた。その里親に会いたかったのだろうが、今回のツアーには来ていない。会えな



くて気落ちしたようだ。

自分は仕事をして親を助けることにした。自分は勉強をあきらめるが、その代わり妹を奨学生にして欲しい、と言っているようだ。里親は、この子の勉学を支援すると決めて見守ってきた。途中で失敗があっても乗り越えて勉学を達成してほしいと願っているはずなのに、自分はいいから他の人（妹）に支援を回してくれと頼むのは筋が違う。

「自分の人生は自分で選択して決めなさい」と大西さんが怒って言っていた。親のことや妹のことよりもまず自分がどうしたいのかをいちばんに考えなさいということなのだろうけど、その時ぼくは鈍感で何が問題なのかわからなかった。ちょっとイライラした感じで大西さんが、「何か私たちに聞きたいことがあるか」と聞くと、同席している日本人のぼくらに、「結婚しているか?」「子どもはいるか?」など関係ないことを聞いてくる。大西さんがあきれてしまって、怒って話を切り上げて帰らせる。

奨学生として支援をしているが、一人の生徒の人生に分け入って関わっていくことが実際にはできない訳だから、いろんな齟齬（そご）が生じてしまうのも仕方ない、と思うしかない。

もう一人、一昨日奨学生の集まりの日に来なかった女生徒が父親と一緒に事務所に来る。昨日も来たが、里親への手紙を持って来ていなかったので出直すように言われた生徒だ。

大西さんに問いかけられてもしゃべれない。お父さんが口をはさんでくるのを大西さんが制止する。英語は通じない、ベンガル語はこちらがわからない。「話さない」と問い詰められても口を閉ざしたまま。成績表の説明を本人に聞いても答えられない。里親への手紙を声に出して読むように言われて泣きだす。緊張しているからだ父親が口を挟む。なんとか声に出して読みきった。タリクさんの事務所の人にも口を添えてもらい、ちょっと表情もやわらいで終わる。

英語がしゃべれない、ベンガル語もしゃべれない、日本語でもしゃべるのが苦手なぼくも、知らない外国語で話しかけられたら口を閉ざしてしまうだろう（笑）。

事務所からの帰り、新入生 20 人分のランチ皿をいつものお店で購入する。

1 月 14 日（月）

アナスとロシュミアは学校が休みなので、ワンドロップ小学校へ来てくれる。

8 時出発、9 時学校着の予定が、バングラ時間で遅れて 9 時 40 分頃に学校着。

1 限に学年ごとに身体測定。体重と身長を計測と個人写真。ロシュミアが名簿順に並ばせてくれたので、とてもスムーズにできた。

今日は、貼り絵、紙皿でフリスビー作り、切り絵などをして楽しむ。

放課後、4 年生のアドリの家に家庭訪問。親は仕事をしていて、この子が弟妹の面倒も見ながら家事を全部しているという。貧しくてきわめて質素な暮らしだ。部屋には、家族みんなの居間になるベッドがあって、土間の片隅に煮炊きのカマドがあるだけ。ここに暮らす子らのことを思うと切なくなる。



3 時ころ、タリクさん事務所。新しい先生の予定の女性が来ている。穏やかで人柄のよさそうな人だ。見た目、ちょっと年配のようだが 40 歳前後らしい。教育の経験はある。ほかの 4 人の先生とうまくやっていけたらいい。

5 時、日本食を振る舞うための食材を買って帰る。いつも行くアーロンで土産に頼まれているハチミツ

を買う。大3個、小7個。

\*ぼくはバングラデシュだけでなく、日本でもどこでも人としゃべることが苦手。しゃべりたくない。黙って一人でいるのがいい。けど、みんなが冗談、ジョークを飛ばして大笑いしているのを聞くのは好き。その会話に入って行けずにニタニタ笑っているぼくは、みんなから奇妙に思われているだろう。タリクさんジョークに大西さんも、浅田さんも、岡さんも、安達さんも軽妙にやり取りができる。湯下さんも慣れてきて「なんでやねん！」と突っ込みを入れる。

大好きなブッダのおじさんは自分の机にいつも浅田さんの写真を置いているのもみんなの笑いのネタになる。タリクさんが「シュンドール浅田！」と呼びかけたら、「シュンドール岡！」「シュンドールエリ！」と次々広がっていく。学校でも、ふざけてタリクさんが「シュンドールあさだ！」と言うのを聞いた子どもたちが喜んで「シュンドールあさだ！」とはやし立てる。子どもたちも楽しいジョークが大好きなのだ。

そんな中で一人浮いているのが、ぼく。

1月15日（火）

7時朝食。8時出発、の予定。

9時10分に学校に着いたら、新しい先生がすでに来て待っている。一日見学してみて良ければ2月から正式採用ということだったが、さっそく子どもたちの輪の中に入って心をかよわせている。

3年。浅田さんが用意した小さな人形を竹筒に入れて、切り絵を貼って竹筒を飾る。とてもかわいいのができる。3年生は、切り絵も上手にできるようになっている。



2年。けん玉遊び。子どもたちは大喜び。新しい先生はけん玉が上手で手本を見せてくれる。いつの間にか子どもたちが先生の周りを取り囲んでいる。

4年。フリスビー。さすがに4年、色塗りが上手にできる。グラウンドに出て飛ばし合っこをすると、4年生でもわれ先にと、指示に従わない。リーダー役のアドリが先生の代わりに指示してくれる。

学校が終わって4人の先生がタリク事務所でサラリーの協議、成立。新任の先生とも契約成立。

バングラデシュでは、最低賃金が大幅にアップして、先生らの要求も高かったようだが、タリクさんが対応して交渉妥結！

<サラリー>

ラブリー先生=7,050TK ナジマ先生 6,450TK ジャスミン先生=6,450TK

ファルジャナ先生=6,000TK サイマ先生=4,950TK セリナさん=4,950TK

<ボーナス>

ラブリー先生=4,700TK ナジマ先生=4,300TK ジャスミン先生=4,300TK

ファルジャナ先生=4,000TK サイマ先生=3,300TK セリナさん=3,000TK

1月16日（水）

7時朝食。8時20分出発。

2限から授業に入る。

竹人形 / 紙飛行機 / 絵など

4年のスポーツでは、大縄跳びのあと、子どもたちがバングラデシュの歌とダンスで盛り上がる。器楽演奏の時間では、カスタネット、タンバリン、ピアニカなどで楽しむ。「カエルの歌」など日本の歌を上手に歌っている。ここの先生らがこんな楽しい授業を続けてやってくれたらいい。

ただナジマ先生は、本人は気づいていないけど音感が悪いようだ。「カエルの歌」の歌詞を「手をたたきましょ」のメロディーで歌っているらしい。生徒はわかっているから、ナジマ先生が歌い出したらあきれ顔。ピアニカの練習でも、生徒がやりたくて仕方ないのに、生徒ほったらかしで自分を取り込んで練習している。練習は生徒が帰ったあとにしなさいよ！でも、生徒たちのことが本当に好きな人だったら、こんな先生がいてもいいかな（笑）



帰り、運転手のミダンさんの家に招待される。お孫さんがかわいい。英語がしゃべれる。お孫さんは、安達さんが大好きになったようだ。

夕食は、浅田さんが中心になって和食のディナー。アナス、ロシュミアの友だちも4、5人来て珍しい和食を楽しんだ。

1月17日（木）

6時半、散歩。湖のある公園まで。帰りはリキシャ。日本人が乗っているから、わざわざ遠回りして代金をボラレタ。やっぱり（笑）。

7時半、朝食。8時、出発。9時、学校着。

新しい先生が来ている。正式な採用は2月からだが、子どもたちの中にすっかり溶け込んでいる。他の先生たちとの関係も悪くないようだ。

ロッカールームの整理。この部屋（校長室？）には教員が入ってはいけないことになっていたから、ロッカーに入ったままの教材がカビだらけ。せつかくの教材を活用するため、部屋の鍵を管理している校務員のセリナさんに断ったうえでカギを開けてもらって教員も部屋に入れることにする。

浅田さんが、新年度のカリキュラムの案を作る。浅田さんの頭の中にはコンピューターが組み込まれているようだ。

日本人が授業に入るようになって数日、子どもたちの歌声が校内に響きわたり、グラウンドでは子どもたちが元気に走り回るようになって学校生活に活気が出てきたように感じる。

ラブリー先生が作ったビリヤニのランチ、2回目。美味しくお腹いっぱい食べられて子どもたちは本当にうれしそうだ。



ランチのあと、子どもたちとお別れ。各学年を回ってさよならのあいさつ。

子どもたちは、2階の廊下に並んで見送ってくれる。アバールデカホベ！

さよならの挨拶の中から子どもたちが「シュンドールあさだ！」の連呼！（タリクさんジョークが子どもたちの間にも浸透している。笑）

コミッラの活動が終わって、ダッカに向かって出発。大渋滞で4時間かかる。ラジョンさんのすご腕の運転にみんな車酔いも忘れて興奮。女性陣がスゴイ！コワイ！と声をあげるからラジョンさんもエキサイト。負けん気強く、反射神経抜群、運転技術抜群。楽しいドライブになった。

ラジョンさんと別れる時、安達さんが紙切れをそっと渡された。あとで見たら彼の名前と電話番号が

書かれたものだった。嫁さんも子どももいるのに！みんなで大笑い

いつものホテルに行く前に、ジョニさんの友人のマンションでディナーをよばれる。この友人はぼくと同じ70歳くらい。体格はすごく良くて15キロの遠泳（実際は潮の流れで25キロ）を達成して新聞にも載った人。家や土地をたくさん持っているお金持ち。でも、貧しい人たちに援助を惜しまない人。彼のマンションには、貧しい家庭の母と2人の子を引き取っている。母はハウスキーパーで、子どもたちはここから学校に通わせてもらっている。ジョニさんも、伊藤忠のダッカ支店に勤めながら貧しい子らへの援助をしている。いい人たちだ。

1月18日（金）

ダッカのホテル。7時、公園を散歩。8時、ホテルの朝食。ビュッフェ形式で料理が以前より美味しくなっている。

11時、日本大好きな友人、ルダバさん（小学校の先生）、ナフィサさん（日本大使館勤務）に会う。

パシュミナの買い物をして、バングラデシュの店で昼食。初めてマトンのビリヤニを食べる。そのあと喫茶店でコーヒータム。女性らは愉快的な話で盛り上がっている。よくしゃべる！

午後3時、ホテルに帰る。3時半、ヤスミンさんと一緒にシアタークラスに行く。途中から大渋滞。4時半に着く。

シアタークラスの子らは元気だ。明るくて快活だ。みんなとてもいい笑顔だ。代表に選ばれた何人かが歌、ダンス、ひとり芝居を披露して歓迎してくれる。

ぼくが里親になっているポーリーは、表情もどちらかと言えばいつも暗くて、表現にも温かみに欠けると感じる子だけど、いつも代表の中に選ばれて踊っている。

大西さんとヤスミンさんが奨学生の面接をしている間、モバイルとブレスレットを作って楽しむ。



ポーリーが落第。体調が悪くてテストが受けられなかったようだ。クラス8をもう一度することになった。一回のテストを何かの事情で受けられなかっただけで落第、というのもどうかと思うが、彼女にやむを得ない事情があったのか、怠けなのかかわからないが、モバイルを作っている時、はにかんだ笑顔で

「ヤマナカ」「ヤマナカ」と呼んでくれただけで、ほだされて支援を続けてやることにする。

“Your loving daughter”と、英文の手紙も手渡してくれると、にやけてしまう（笑）

シアタークラスからの帰り、中国の舞踊団の発表を国立劇場で見る。客席には中国人がいっぱい。欧米の人はほとんどいない。バングラデシュの子どもたちが、中国の子どもたちと交流しているらしい。ヤスミンさんのお兄さんがこの公演の中心人物らしい。

帰りの車の中で、大西さん、ヤスミンさんが歌をうたう。ヤスミンさんの歌声はプロのもの。それに連れられて湯下さんも歌いだす。この町の印象は「〇〇のうた」が、コミッタの村の印象は「〇〇のうた」が似合う、と言ってちょっと唐突に歌いだす。彼女の心のバールがさぁと取り払われたみたいだった。このスタディーツアーの仲間に溶けこんだ。ワンドロップ小学校の子らの似顔絵も描いてくれるらしい。毎年、卒業学年の20人の子らの似顔絵を描いてくれたらいい思い出になる。

卒業学年と言えば、ワンドロップ小学校の修学旅行があってもいいな、と思いつく。

1月18日(土)

6時50分、朝食。7時半、ヤスミンさんの村のナワブゴンジュに向けて出発。10時前に着く。

道路両側に大きな街路樹があっていい風景だったのに、道路拡張のために伐採されてしまった。惜しい。菜種の黄色い花が咲き、田植えも始まる季節。

公立と、私立の小学校を1校ずつ訪問。どちらも小さな規模。上級学年はスポーツデーというので登校していない。1年～3年。プレ小学校のクラスもある(15人ほどの幼稚園児が親子で来ている)



1クラス15人前後。暗くて狭い。机も椅子も粗末。トタンぶき。2部制で午前の子と午後の子に分かれて授業。35分授業で、あまり十分な教育が施されていないように思う。

義務教育の段階で、落第する子がわりといるらしい。100%進級の学年もあれば、90%、70%というものもある。テストの時、欠席しているのが理由だとか。あまり手厚く面倒見てもらえていないのだろう。

鉛筆一本ずつ配る。

そのあと菜の花畑へ行く。満開の時期をちょっと過ぎているが、きれい。心が休まる。

1時、ヤスミンさんの家の豪華なランチ。樹々に囲まれた裏庭で食べたから余計に美味しい。タリクさんの家の料理も美味しいし、他のどこでいただくバングラデシュの料理も美味しくていつも食べ過ぎていく。けど、ここの料理がいちばん洗練された味。

ナスビの天ぷら、魚のから揚げ、鶏肉の煮込み、小魚と野菜の辛い煮込み、そしてビリヤニ。コリアンダーをすりつぶしてペーストにしたのはじめての味だった。

2時半、奨学生が集まって来る。



面接のあいだ、ブレスレット作り、折り紙、フリスビー作りを楽しむ。この村の奨学生のノヨン君(大西さんが里親)は、小学校訪問の案内をしてくれた。他の奨学生のことに気配りできる好青年になっている。奨学生らが手作りの作品をプレゼントしてくれる。

奨学生の一人、シマントくんが留年。ミナコ奨学金は、健康で、成績優秀で、将来有望な選ばれた人に支給されるものではないと思っている。体が悪くても、成績が優秀でなくても、品行方正でなくても、子どもにはみんな等しく勉強が受けられるべき。順当に進まなくても、回り道をして、頑張っって自分の人生を切り拓いて行ってほしい、という願いを込めたものだと思っている。留年してもまじめにやり直そうとする人には支援を続けてあげたい。

ダッカへの帰り道、少し渋滞があったが、6時ころホテル着。

湯下さんが一日早く、今夜8時にダッカ空港から帰る。(ホテルの車で空港まで送ってもらえた。出国の手続きまで見てくれたらしい)

9時、ヤスミンさんと奨学金の支払い手続きをする。

1月20日(日)



6時半、起床。6時40分、公園散歩。7時半、朝食。

ぼくの奨学生だったフマヤンくんが来る。前夜、グーグルの翻訳機能を使って、「元気か?」「会えてよかった」「家族のみんなはげんきですか」「その後半年間、勉強はしっかりできたか」「テスト受験の手続きはしたか」「合格するように願っている」などと、英文をメモしたりして、ほかですね。

9時、これまではいつも約束の時間を大幅に遅れることがたびたびだったのに、今日は時間通りに来た。12月のテストは合格したが、最終のテストを受ける前に、父から「2回も失敗したのだから、受験はするな!」と言われて、受けないことになった。奨学金の一部を貯めていて、そのお金でマイメイシンの村で農地を買い、パイナップルやマンゴーなどの果樹園を育てて売る仕事を始めているという。



本人は、来年こそ自分の力でSSCのテストを受けて合格する、という気持ちを持っているという。教師になりたいという夢が実現できればいいが、それができなくても自分の力で自立して生活できる力をつけられればいい。

次回7月に来た時には、彼のお父さんとも会って彼の将来について話ができればいい。そして、マイメイシンへ行って、彼が作ったパイナップルやマンゴーが食べられたら、どんなにいいか。

奨学生のための奨学金でなくて、ぼくが楽しむ、喜ぶための奨学金になっているようだ(笑)

彼の言葉で、「本当のお父さん」と「日本のお父さん」がいるそうだ。外に出て一緒に食事をしようとして誘ってくれたが、無口な彼と、日本語しかしゃべれないぼくと、男二人が黙って食事するのは様にならない。彼には悪かったが、このあと別の奨学生と会う予定があるからと断ってしまった。

小さくても自分の農園で働く彼のことを想像するとうれしくなる。

このあと、ヤスミンさんが紹介する奨学生希望の二人が父親と一緒にホテルに来る。一人は支援してもらえる里親が見つかったが、もう一人は里親がまだ見つからないので待ってほしいと伝える。

これですべての活動が終了。

初めて参加した安達さんは、ダッカ空港に着いたその時から心がパツと開かれたようだ。みんなから「エリさん!」と呼ばれて、バングラデシュの人たち、子どもたちに大歓迎される。安達さんの人柄ゆえのこと。カンボジアより、バングラデシュにはまってしまうのでは(笑)

湯下さんも、マイペースでバングラデシュの子どもたちに親しんでいこうとしていた。ぼちぼち仲良くなっているのがいい。ぼちぼち、タリクさんジョークにはまって、恥じらいながら「なんでやねん!」と突っ込み入れたりしているのがほほえましい。湯下さんは子どもたちの似顔絵を描く約束をしたみたいで、スタディーツアーの常連になりそう!?

岡さん、子どもたちの名前を必死になって覚えようとしているのがいい。大きな声で、子どもたちに体当たりでぶつかっていくのがいい。覚えたベンガル語で、みんなに話しかけて行っているのが素晴らしい。みんな、怠け者のぼくにはできないことだ。

浅田さん、頭に埋め込まれたコンピューターでカリキュラムを組み立てていくのがすごい。子どもたちと遊ぶあれこれが次から次へと生み出される。下準備も万端で、授業展開をするプランも的確だ。子どもたちの心を一瞬のうちに開かせるのもすごい。支援物資の仕分け、現地で支給するときの段取り、裏方の仕事までやってもらってお疲れさん。

大西さん、スタディーツアーのすべてを段取りしてもらってご苦労さんです。現地での活動のすべてにわたって、その取り仕切りをお任せしています。大変でしょうけど、あとに続く人が育つまでまだ頑張ってもらわなければなりませんね。

(山中 勇)